



陣川(昭和40年)

旧区界が教えてくれる事

三橋 昭

昭和二二年三月十五日、大田区が誕生しました。

昭和七年に出来た東京市大森区(大森町・入新井町・馬込町・池上町・東調布町)と、蒲田区(蒲田町・羽田町・矢口町・六郷町)が合併して誕生した区です。大森区の「大」と蒲田区の「田」を取って「大田区」と称します。

蒲田モダン研究会では、二回にわけ区界を歩くフィールドワークを実施しました。

まずは、現在の東蒲田と大森中の区界から池上まで歩きます。このエリアはかつて海苔漁が盛んだったエリアです。旧呑川は海苔船の重要な航路でした。川沿いのテンマ置き場が児童公園に姿を変えています。そして、ここらが古くから家々があったことを伺わせる「古海道」が東西に貫いています。東海道が整備されるまでは、重要な街道でした。そして呑川から離れ、区界はかつての六郷用水路であった陣川が目印となります。目印と言っても今は暗渠ですから、水の流れを目にする事は叶いませんが、道の片側だけにあり歩道が想像力をかき立てられます。「陣川」もしくは「じんがぼり」とよばれた水路沿いに区界が続きます。そして

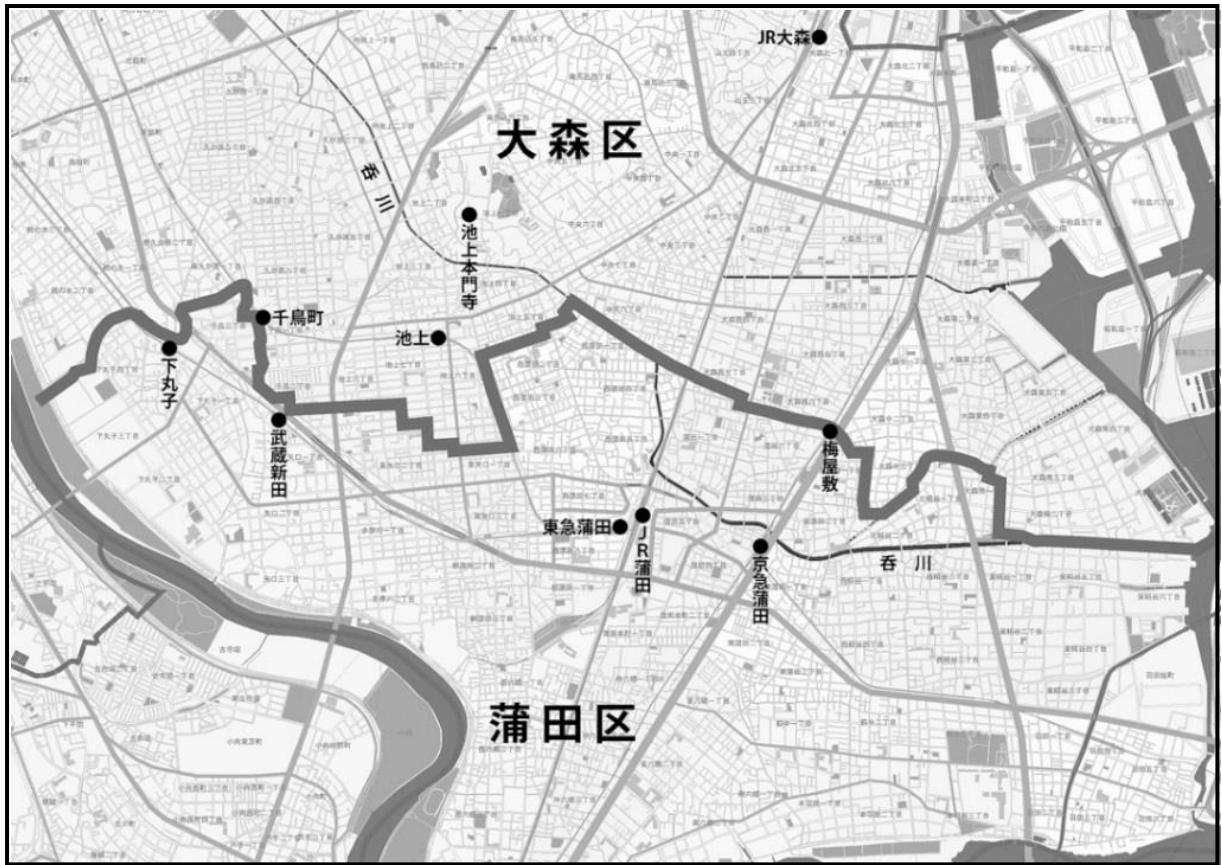
第一京浜国道を横切り、更に上流へと続きます。現大森西六丁目と現蒲田二丁目が接する道が梅屋敷商店街になっています。

ここで面白いエピソードを一つ。この辺りは荒地地で、江戸時代末期、当時の北蒲田村の地主たちは、年貢を取られるよりはと、ここら辺約十三町歩程を酒二升つけ西大森村に進上してしまっただけです。のちに商店街として栄えるとは夢にも思っただけな事でしょう。

さて、その後旧区界は呑川を北上、大森高校あたりで西に進み、ポニー公園でかつてここら一带に明治三五年(一九〇六)開場した競馬場があった説明を読み、明治に思いを馳せます。

続きは別日、池上駅に集合して旧徳持(現、池上六丁目(八丁目)、千鳥二丁目、一丁目と進み、下丸子と鶴の木の間を進みます。しつかり耕地整理され、広い碁盤の目に区切られた一带には、池上競馬場がありました。今はその痕跡は皆無です。

第二京浜を渡ると住所表示は千鳥。かつての区界が複雑に折れ曲がっているのが千鳥二丁目。住所表示は千鳥なのに、住居表示の二七番、三〇番、三六番、三八〜四〇番が矢口特別出張所管轄で、それ以外は鶴の木特別出張所管轄なのですが、なぜかと言うと、特別出張所の区分けが、旧大森区と旧蒲田区に準じているからです。そう言ういきさつを無視して広い道路を基準に新住居表示を決めちゃっ



た結果と言えるでしょう。

千鳥二丁目には、歴史を感じさせる一角があります。千鳥二丁目一二番〜三二番の一带は、狭い短冊状の路地で区切られています。なぜ、ここだけ周辺と違うのでしょうか？実はここには昭和一四年（一九三九）、同潤会の分譲した調布千鳥町住宅が建てられています。近隣の工場に勤める工員向けの住宅です。

そしてここには、大正一五年（一九二六）から昭和九年（一九三四）まで慶應大学のグラウン

ドと野球場がありました。ということで、池上線の千鳥町駅はグラウンドが日吉に移転するまでの間、「慶大グラウンド前」と言う名前でした。駅は今の千鳥町駅より池上寄りであったとのこと。実は、千鳥町駅の久が原寄りには「光明寺」と言う駅が有りました。電鉄会社にとっては、寺社への参拝客、学生の利用は重要な収入源でした。どう見たって慶大グラウンドも光明寺も当時の目蒲線の方が近いですが、あえて集客を狙った駅名と言えるでしょう。慶大グラウンドがなくなったため、駅は今の位置に移転し、「光明寺駅」も廃止されました。

話が横道に逸れてしまったので、区界の話に戻ります。千鳥町駅を過ぎると、台地の裾にかつての六郷用水北堀が流れています。ここが区界かと思いきや、久が原の大地部分を区界が横切っています。考えてみれば、六郷用水を開削する以前から集落はあったわけで、下丸子で畑作を行っていた農家の家々が、大地部分にあっても当然です。今の環八と多摩川の間はしょっちゅう氾濫を繰り返していたわけで、農家の人たちは、氾濫にあっても大丈夫な大地部分に家を建て畑に通っていたと考えるのが自然です。やがて区界はかつての多摩川蛇行跡の光明寺池（高いフェンスに囲われ中を覗くことは出来ない）から、多摩川線を横切り緩やかなカーブの道へと続き、程なくかつての三菱重工工場跡の土手にぶつかり多摩川の先は川崎市となります。